エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２６１号

2024 年 1 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より（６）

ガラテヤ書はロマ書を圧縮したような文章

ご承知の通り、ガラテヤ書は、第 1，2 章において福音の性質の話をし、第 4，5 章において福音の内容を述べ、第 5，6 章においてその福音が我々の生活に及ぼす効果について述べているのでありまして、誠にガラテヤ書は、福音を知るのに適当なる手紙であります。ロマ書を圧縮したような文章であります。本日の箇所は、「福音の内容」を述べた場所でありまして、その内容は律法と福音とを比較して、福音の優れている点を述べた場所であります。

アバ、父よ

「このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。」（ガラテヤ4・6）

イエスが我々に子たる身分を与えるために来られたので、あなた方、我々一緒にそれを受けて、子たる身分を受けたのであるから、心の中に「アバ、父よ（Abba,father!）と呼ぶ神の子たる身分の霊を下さったのである、と。

「御子の霊を送って下さる」という動詞の態は、ギリシア語の特徴ある不定過去の形ですので、過去に１回送って下さった、という意味がはっきり出ております。我々が「アバ、父よ」と言い始めるのは、過去の一定の時期であります。そういうことがこの文章から伺えます。どうですか、皆さんの経験では。ある時に、我々は「天に在す父よ」という祈りができるようになります。石館兄弟によれば、イエスがゲッセマネの祈りの最初に、「アバ、父よ」と言われた、という。我々が救われているか、救われていないかは、ここに出て来ます。「天に在す父よ」と言えるものが信者であり、これが言える時に、我々はこの世のいかなる困難、悲しみ、苦しみに打ち勝つことが出来る。イエスが例を示しました。イエスは、十字架を前にして「アバ、父よ」と言いました。「アバ」という字は、アラミ語の「父」という意味です。また、次の「父」はギリシア語です。…これは、キリスト教の正論、こういうことを学ばなければなりません。

あなたがたは、子である

「したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。」（ガラテヤ４・7）

パウロはまたここで、結論をくり返しています。日本語では、「あなたがたは」と書いてありますが、原語では単数、「あなたは、あなた一人一人が」という意味であります。日本語はこういうところがあいまいです。即ち、あなたは僕ではなく、子である、と。律法・道徳などのこの世のものに縛られてはいない。律法・道徳、名誉、知識、あるいは、よい学校に入りたい、などということとは違う。そういうものは小学である。今まではそういうものに縛られていたが、そのお陰で福音を知るようになった。「子である」以上、我々は神によって相続人である。イエス・キリストと同じく、復活して、天地の主となる。パウロのロマ書の言葉によれば、「イエスの共同相続人（joint heir)」となる身分であるという。

誠に、キリスト教の教えるところは、天地、宇宙を包むところの教えであります。我々人間の理性を持っては理解出来ない。科学者はこれを迷信というかもしれないが、迷信であるか、迷信でないかは、我々の実際の生活が証明します。

仏教、浄土門と同じ原理

イエスの十字架と復活、このイエスの目的によって、我々は「子たる身分」を獲得しました。これは「我々の」とつく何物にもよりません。「神によりて」であります。ルッターは、これを「キリストによりて」と訳しました。

そうですから、我々はキリストの贖い、復活によって養子として誕生したのであります。生まれる、生まれ変わる、ということは、人間の努力や信仰では出来ない。自分で生まれ変わることは不可能です。これは聖霊によります。聖霊によって、神の言葉を信じて救われるということは、全く仏教、浄土門と同じ原理であります。私は東西同じくして、この原理が厳然として歴史に残っていることを誠に不思議に感じます。

第2の感想、我々に子たる身分を与える、これを「福音」という

この前の日曜日に、石館先生が、マルコ伝第11章から16章までを毎日読むようにと言われました。私は、先生のお勧めに従って、月曜日から6日間、毎朝1章ずつ読みました。マルコ伝においても、16章のうち、6章は十字架と復活に費やされています。イエスがこの世に来られたのは、本日の5節のパウロの言葉によれば、我々の罪を贖い出すため、我々に「子たる身分」を与えるためであります。マルコ伝もこのことを証明していると見てよい。そしてこれはあまりにも単純であります。ただ、イエスの約束を信じて、「主を仰ぎ見る」、「主は我が救い主なり」と告白するだけであります。単純極まる方法をもって、我々に「子たるの身分」を与える、これを「福音」という。

この世を去る時に福音の必要がきっと来ます

福音は我々の知恵、人間の理性を超えていて、ここに福音理解の困難さがありますが、これが救いに入る唯一の道であり、これが過去 2000 年において、人類の歴史が救いを経験した根底であるためであります。そうですから、現在、君達は福音を信じることが出来なくとも、無理に信じる必要はありません。しかし、これが根底であって、この上にキリスト教が立っているという、その事実を知っておく必要があります。どうか、福音とはこういうものであることを覚えておいて下さい。必ず役に立つ時が来ます。50 年、70 年で来なくても、君達がこの世を去る時にその必要がきっと来ます。キリスト教とはそういうものです。善行するとか、聖書にもいろいろな道徳がありますが、そういうものは付いて来るものであり、土台の上に立っているものであります。我々の理性、我々の我（が）がある限り、自分の考えを振り回しています。我々は十分信仰を持っておりましても、幼子のようになって、この福音を傾聴する必要があります。その福音の内容とは、次の第 4 章 4－7 節です。

救われて「アバ父よ（わが主イエスよ）」と呼んでいるではないか

「しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生まれさせて、おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがないだすため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。このようにあなた方は子であるのだから、神はわたしたちの心の中に「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。したがって、あなたがたはもはや僕でなく、子である。子である以上、また神による相続人である。」（ガラテヤ書 4：4-7）

信じたものには、神が聖霊を下さって、ある一定の時期から、「アバ、父よ」という祈りができるようになるという。これを信者と言います。それ以外を信者とは言いません。求道者です。我々は、信者であるか、求道者であるかをしっかり知っておく必要があります。

これがガラテヤの信者の状態でありますが、彼らは、信者といえども最初からそうではありませんでした。それ以前に未信者の時期がありました。未信者の時分には、まだ自分の道徳、自分のこの世のものに仕えていたという。この世の名誉、この世の地位、この世の学問、この世の人間の思想、人間の色々な律法・道徳、そういうものに君たちは縛られていたという。私は、この縛られている理由は自我にあるとおもいます。自分中心的なことに縛られている。子の自我に縛られていることが分からない所に病根があります。分からずにこれ

をよいことのように思っています。

即ち、1－7 節の大意は、ガラテヤの信者である君たちは、今はキリストの罪の贖いにより神の子たるの地位を得たという福音を信じて、その身分を獲得して、「アバ、父よ」と呼んでいるが、よく考えてみるがよい。君たちは信じる以前には、この世のものに縛られていたではないか。この世のものの奴隷、自分自身の奴隷となっていたではないか、しかし、今は、神の子として永遠の命の約束を受けて、救われて「アバ、父よ」と呼んでいるではないか、ということです。

ユダヤ主義も異邦人の道徳主義も共に間違い

誤れるユダヤの教師たちは、道徳を守ることがパウロよりも進んだ状態である、パウロの福音だけでは救われない、と、福音プラスこのような律法を行なうことが必要であり、それで救われるのであると言いました。

しかし、この考え方が我々キリスト教信者の大なる誤りです。福音をぼやかしていることになります。それは、福音の進歩ではなく、退化です。パウロの理解では、異邦人が律法・道徳を守って善行することが神の救いに反対していると同じく、ユダヤ人が自分の律法にしがみ付き、忠実なるユダヤ主義者となり、それによって救いを得ようとするのは、同じく間違いである、と言いました。パウロは、ユダヤ主義も異邦人の道徳主義も共に間違いであると言いました。ルッターもまた同じことを言いました。ユダヤの律法、この世の道徳もよいのです。しかし、これをもって救いの道具に使う時に、これは間違いである、と言っているのであります。

第１の感想――福音は「主の名を呼ぶ道」――

逆戻りはガラテヤの信者だけでは無い。多くのクリスチャンは逆戻りしています。我々信者と言って、福音を知っている信者が逆戻りをしています。善行をもって、神学をもって、聖書の勉強をもって、教会を建てることをもって、逆戻りしつつあります。そして、この逆戻りするというその本性は、人間の本性に基づいています。我々はまだ、自己が死んでいません。自己中心で、この世のものにしがみついているというその本性は、ちょっと福音を聞いたぐらいでは直りません。…

我々はこの世のものにへばりついています。この世の道徳、この世の善行ににへばりついている方が易しい。福音にへばりつくことはむしろ難しい。この世にへばり付いている者にとっては、逆戻りするのが当然でであります。新約聖書には、イエスは山上の垂訓その他において、律法を行なえ、十字架を負って我に従え、律法によって救われる、などというように解釈できる部分がたくさんあります。部分的に読むと、律法をもって救われるという、いわゆる律法主義と解釈できる部分が沢山あります。…しかし、福音は、賜物を受けて、キリストを仰ぎ、主は我が救い主なり、と「主の名を呼ぶ道」であります。

君達はどちらの道を選んでいますか。我々は仰ぎ見る道、主の名を呼ぶ道、その完全にして簡単なる道を選び、そして、我々の努力をもって、我々の目の前に置かれた自分の義務を尽くす必要があります。

第2の感想――簡単な道が神の知恵――

言葉は甚だ足りませんが、福音の真理性ということについて。そういう単純なイエス・キリストの贖いを信じるだけ、主を仰ぎ見るだけ、主が救い主であるということを告白するだけ、そういう簡単なる道をもって、それを信じて、それに食らいついて、我々が永遠の生命を得るという真理、これは神の知恵であります。その尊さ、意義についてちょっと自分の考えを述べたいと思います。

何故神は、福音を信じるという、単純にして簡単なる方法を選ばれたのであろうか。パウロはこれを「神の知恵」と言いましたが、私は、これは万人に可能であるからであると思います。我々は力ありと思っておりますけれども、我々は無力です。救いの条件として、何か一つ言われたら、我々は出来ると思っていたら間違いであります。我々はこんなに簡単で、神がおかしいと言って馬鹿にしますが、果たして我々に何かする力があるか否かを検討すればよろしい。朝6時に起きることを条件にされたら、1，2日は可能でしょう。しかし、ちょっと風邪でもひいたら実行できません。ちょっと前の晩に仕事をしたら、もう起きられなくなります。終生、続けてやるとしたら、我々は99%落第です。しかし、主を仰ぎ見る、主の名を呼ぶとなったら、万人に可能であります。

もう一つの理由は、この十字架のあがないを信じること、これは神に全部任せることになると思います。自分の知恵を働かせずに、神に全部任せることになる。完全なる服従は、完全なる平安(Perfect sabmission is perfect ease.)

という言葉があります。神に全部任せて、神に全部従う、という人間にとって至難なることをこの簡単なることによってなし得る可能性がある、と私は思います。これは、実に、人間に与える一つの神の知恵であり、我々に対する方法であろうと思います。